

2025 年度

文学部 総合型選抜Ⅲ期

(文章読解型)

【小論文】

60 分 100 点

次の文章を読んで、設問に答えなさい。(100点)

ものごとを自分の観点からばかり眺めていると、どうしても世界がぐつぐつと煮詰まってきます。身体がこわばり、フットワークが重くなり、うまく身動きがとれなくなってきました。でもいくつかの視点から自分の立ち位置を眺めることができるようになる、言い換えれば、自分という存在を何か別の体系に託せるようになる、世界はより立体性と柔軟性を帯びてきます。これは人がこの世界を生きていく上で、とても大事な意味を持つ姿勢であるはずだと、僕は考えています。読書を通してそれを学びとれたことは、僕にとって大きな収穫でした。

もし本というものがなかったら、もしそれほどたくさんの本を読まなかったなら、僕の人生はおそらく今あるものよりもっと寒々しく、ぎすぎすしたものになっていたはずでAす。つまり僕にとっては読書という行為が、そのままひとつの大きな学校だったのです。それは僕のために建てられ、運営されているカスタムメイドの学校であり、僕はそこで多くの大切なことを身をもって学んでいきました。そこにはしちめんどくさい規則もなく、数字による評価もなく、激しい順位争いもありませんでした。もちろんいじめみたいなものもありません。僕は大きな「制度」の中に含まれていながら、そういう別の自分自身の「制度」をうまく確保することができたわけです。

僕がイメージしている「個の回復スペース」というのは、まさにそれに近いものです。何も読書だけに限りません。現実の学校制度にうまく馴染めない子供たちであっても、教室の勉強にそれほど興味を持ってない子供たちであっても、もしそのようなカスタムメイドの「個の回復スペース」を手に入れることができたなら、そしてそこで自分に向いたもの、自分の背丈に合ったものを見つけ、その可能性を自分のペースで伸ばしていくことができたなら、うまく自然に「制度の壁」を克服していけるのではないかと思います。しかしそのためには、そのような心のあり方Ⅱ「個としての生き方」を理解し、評価する共同体の、あるいは家庭の後押しが必要になってきます。

うちの両親はどちらも国語の先生だったから(母親は結婚したときに仕事をやめました)、僕が本を読むことについては、終始ほとんど一言も文句を言いませんでした。僕の学業成績に対して少なからず不満は持っていますが、「本なんか読まないで試験勉強をしろ」とは言われなかった。あるいは少しは言われたかもしれないけど、記憶には残っていません。まあその程度にしか言われなかったのでしょう。それはやはり僕が両親に対して、感謝しなくてはならないことのひとつであるように思います。

僕は学校という「制度」があまり好きになれませんでした。何人かの優れた教師に巡り合うことができて、いくつかの大事なことは学べましたが、それを相殺^{さうさい}して余りあるくらい、ほとんどの授業や講義は退屈でした。学校生活を終えた時点で、「人生でもうこれ以上の退屈さには必要ないんじゃないか」と思えるくらい退屈でした（いくらそう思ったところで、僕らの人生において、退屈さは次から次へと、容赦なく空から舞い降り、地から湧き出てくるわけですが）。

でもまあ、学校が好きでしかなかった、学校に行けなくなるとても淋しい^{さび}というような人は、あまり小説家にはならないのかもしれませんが。というのは、小説家は頭の中で自分だけの世界をどんどんこしらえていく人間だからです。僕なんかも授業中は、授業なんかろくに聞かないで、ありとあらゆる空想に耽^{ふけ}っていたような気がします。もし僕が今現在子供だったら、学校にうまく同化できず、登校拒否児童になっていたかもしれない。僕の少年時代には幸か不幸か、登校拒否みたいなことがまだトレンドにはなっていなかったのので、「学校にいかない」なんていう選択肢^{さくし}そのものがなかなか頭に浮かばなかったみたいです。

^B どんな時代にあっても、どんな世の中にあっても、想像力というものは大事な意味を持ちます。

想像力の対極にあるもののひとつが「効率」です。数万人に及ぶ福島の人々を故郷の地から追い立てたのも、元を正せばその「効率」です。「原子力発電は効率の良いエネルギーであり、故に善である」という発想が、その発想から結果的にでっちあげられた「安全神話」という虚構が、このような悲劇的な状況を、回復のきかない惨事を、この国にもたらしたのです。それはまさに我々の想像力の敗北であった、と言っているかもしれません。今からでも遅くはありません。我々はそのような「効率」という、短絡した危険な価値観に対抗できる、自由な思考と発想の軸を、個人の中に打ち立てなくてはなりません。そしてその軸を、共同体^{コミュニティ}へと伸ばしていかなくてはなりません。

とはいっても、僕が学校教育に望むのは「子供たちの想像力を豊かにしよう」というようなことではありません。そこまでは望みません。子供たちの想像力を豊かにするのは、なんといっても子供たち自身だからです。先生でもないし、教育設備でもありません。ましてや国や自治体の教育方針なんかではない。子供たちみんながみんな、豊かな想像力を持ち合わせているわけではありません。駆けっこの得意な子供がいて、一方で駆けっこのあまり得意ではない子供がいるのと同じことです。想像力の豊かな子供たちがいて、その一方で想像力のあまり豊かとは言えない——でもおそらく他の方面に優れた才能を発揮する——子供たちがいます。当然のことです。それが社会です。「子供たちの想像力を豊かにしよう」なんていうのがひとつの決まった「目標」になると、それはそれでまたまた変なことになってしまいそうです。

僕が学校に望むのは、「想像力を持つている子供たちの想像力を圧殺してくれるな」という、ただそれだけです。それで十分で

す。ひとつひとつの個性に残れる場所を与えてもらいたい。そうすれば学校はもっと充実した自由な場所になっていくはずで
す。そして同時に、それと並行して、社会そのものも、もっと充実した自由な場所になっていくはずで

僕は一人の小説家としてそう考えます。まあ、僕が考えて、それでどうなるというものでもないのですが。

(村上春樹『職業としての小説家』による)

問一 傍線部A「読書という行為」が筆者にもたらしたのは、どのようなものか。三百字以内で述べなさい。

問二 筆者は、傍線部B「どんな時代にあっても、どんな世の中にあっても、想像力というものは大事な意味を持ちます」のよう
に「想像力」の重要性を強調している。しかし現代社会の発展には「効率」が寄与してきたとも考えられる。「想像力」と
「効率」をめぐって、あなたの希望する学生生活のあり方を五百字以内で述べなさい。